
まぶしい人は嫌いです

ちゅんた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まぶしい人は嫌いです

【Nコード】

N5714Y

【作者名】

ちゆんた

【あらすじ】

なんともまぶしいイケメン野郎に懐かれてしまった、地味ライフ絶賛満喫中の安藤奈津。

「ナツ先輩！」

「話しかけるな！」

地味ライフを取り戻したい、ツッコミ気質な彼女の日常生活のお話。

ここ最近の不満（前書き）

初投稿です。

軽い気持ちで読んで頂けるとうれしいです。

ここ最近の不満

自分で言うのもなんだけれど、私は地味女である。

肩より短い黒髪をちょこんと両サイドにみつあみにして、制服のスカート丈はいたって普通。

いや、膝上5センチくらいなので長めなほうだ。

特に親しい友人もなく、基本的にいつも一人行動をしている。

かといって、特にいじめられているわけではない。私のクラスは実
にのんきな人たちばかりで、普通に話もするし挨拶だつてかわす仲
だ。ただ特別に仲がいい人がいないだけ。

ちなみに私はそんな生活を、とーっても満喫している。

私は目立つこと・面倒くさいことがなにより嫌いだ。地味で友達が
いない今の生活はとつてもラクですごく最高。

そんな私の生活は単調である。部活も委員会も所属していない私は、
学校が終われば徒歩10分の場所にある家へとまっすぐ直帰する。

そして家の隣にある「セボン又安藤」という名の喫茶店への扉をあ
ける。

「おじいさんただいま」

「奈津おかえり」

コーヒー豆を挽いている香りをかきながら、私は制服のジャケット
を裏部屋へ放り投げエプロンを身につけた。

毎日、私のおじいさんが経営している喫茶店を手伝っているのだ。

(ちゃんと給料はもらう)。

「今日、一人もお客さんいないね」

「そろそろ混みだすんじゃないかな」

おいおい、おじいさん。

意味深な発言じゃないですか。

そう思った矢先のことだ。

喫茶店の扉がバーンと勢いよく開け放たれた。

「ナツ先輩！ひどいじゃないですか！なんでいつつもいつも先に帰っちゃうんですか！今日俺バイトだって知ってるでしょ！？」

出たな。私の平穩を乱す不埒な輩め。

こいつはまきはらたくみ榎原工。私の学校の1学年下の後輩だ。

「知らないけど。あんたのシフトなんて」

「店長！ナツ先輩の部屋にシフト置いといてって言ったじゃないですか！」

「ごめん、コピー機の使い方わからなくて」

おい、おじいさんを使うんじゃない。

「もうっ！じゃあ今から言うつから覚えてください。今月は月・火・木・土なんで、月・火・木は一緒に帰りましょうね」

「知らない、その情報」あんたの後ろにいるお嬢さんがたが思いつきりメモとってますよ。ていうか、今日もどんだけ連れてきてんだ。おじいさんは大喜びだけど（売上のに）、私としてはうんざりだ。だって、榎原目当てのお客さんって若い女の子ばかりで、黄色い声がそこらじゅうにあふれるんだもん。うるさくてしょうがない。

栗色のさらさらな髪に、すらりとした細身の体。ぱちつとした大きな瞳にシャープな小顔。そんでもって人懐っこい爽やかな性格。

100人中100人が認める、嫌みのないイケメン野郎だ。榎原がバイトの日には若いお嬢さん方で埋め尽くされることになる。

はーあ、私はこんなまぶしい生き物とは関わりたくないですよ。人目も気にせず堂々と話しかけられると目立ってしょうがないんですよ。

しかも、よりによってこいつ人懐っこさ120%なんだよな。こんな地味女放つといてほしいんだけど。。。

「ナツ先輩、ぼーっとしてないで仕事してください」

いつのまにやら仕事モードへ突入していた榎原に叱られた。ちくしよ。

ついでに、おしゃれ度0%の真っ白エプロンを着こなすその感じにすら「ちくしょう」と言いたい。

「あんたが全部注文とりな」

「ひどっ」

「うっさい」

お嬢さん方の注文を私 گرفتたら、恨まれるっつての。決して叱られた腹いせではないのであしからず。

「おじいさん、やっぱりあいつクビにしようよ」「マキ君、いい子じゃないか」

はあ……。この様子じゃ奴とは当分縁切れそうにもない。なんとか今までの地味生活を死守しなければ。

はーあ、めんどくさい。。。

おびやかされる学校生活（前書き）

クラスメイトには敬語な主人公。

おびやかされる学校生活

地味ライフにおいて大事なこと。

遅刻などという目立つ行為は行わないのが鉄板である。

なので遅刻するかもなどというスリルとは無縁でいられるように、
常々余裕をもって登校するようにしている。

「安藤さん、おはよ」

いつものように少し早めに登校した私を、前の席の高橋さんが待ち構えていた。

いつも挨拶をかわす仲だけでも、今日は体を後ろに向けている。

つまり私と話す気まんまん体勢をとっている。さらには、その表情がなぜかにやついている。

「高橋さん、おはよう……どうかしました？」

私が席に座るやいなや、高橋さんは身をのりだしてきた。

「安藤さんって榎原くんと仲いいの？」「イイエまったくですが」

なんだって!?

内心、目ん玉が飛び出るほどの衝撃を感じたが、私はかろうじて表情を崩さずにいることに成功した。自分ナイス。

「え、じゃあなんでだろ？」

「……何の話ですか？」

「昨日安藤さんが帰った後に榎原くんが来てさあ、「安藤奈津さんいますか？」って聞かれたんだよねえ。だから仲いいんだって思

「つただけけど・・・」

「人違いではナイデシヨウカ。私はそんな人知りません。まったく知りませんが」

「でもフルネームで呼んでたけど。それに何回か来てるみたいだし。クラスの子も何人が話しかけられたって騒いでたもん」あいつ・・・そんなことしてやがったのか！

学校でそんなことしたら私まで目立つちまうだろうがぁ！

「おまえ榎原と仲いいの？俺に紹介してくんね！？」

急に話に割り込まれたので、声の主を見ると隣の席の山中君が登校なさったようだ。

「山中おはよ〜」

「おいーす。つか高橋足とじろよ。パンツ見えてんぞ」

「朝から盛るのやめてくんない？」

高橋さんに何か言いたそうな表情をしつつも、はあつとため息をついて話を終わらせました。そう、山中くんはやらねキャラなのだ。そんな彼は今はなかったかのように再び私へと向き直ると、不思議そうに眉をしかめた。

「・・・なぜ、俺をそんな目で見る」「山中君がBLだということとを、さらつと告白したことに驚いています」

「はあ！？ちっげーよ、なんでだよ！つか、そんなこと告白した覚えねーよ！」

「さつき榎原くん紹介してくれって言ったから、好きだと思ったんじゃない？」

高橋さんのアシストにうなづきながら、私はあわてふためく山中君

を生ぬるい目で見つめます。

「ばっか、お前！そういう意味じゃねーよ！サッカー部に勧誘するためだよ！」

なんだ。そうでしたか。

ち、つまらん。

「すみませんが私と榎原工とやらは、全くの無関係の赤の他人なので紹介することはできません。ちなみに彼が探しているのは、どこかのクラスの同性同名の女子ではないかと思えます。クラスを間違えるなんてバカな奴ですね、まったく」

私はこれでシラをきりとおします。

そして学校では奴の視界に入らないように、より一層注意深く行動しようと思心に決めた。

遭遇

なんということでしょう。

今朝気を引き締めたばかりだというのに。

一日の授業を終えて、さっそうと帰ろうとしていたところを榎原に捕まってしまった。しかも校門の前という、かなり危険な場所で。

「おいコラ、離せ」

「ナツ先輩、今日こそは一緒に帰れますね」

人の話を聞いちゃいない榎原は、それはそれはまぶしい笑顔を見せてくる。

がちりと私の腕を掴みながら。

ちくしょう。

もし今日も放課後迎えに来たら嫌だなと思って、担任の話が終わったと同時に飛び出してきたっていうのに逆にそれがアダとなったようだ。

6時間目が体育の授業だったらしい奴と、下駄箱でばったりとはち合わせてしまうとは思わなんだ。しかも校門まで追いかけてくるのは。

何が一番腹立つって、あずき色のダサイジャージを着こなしているあたりだ。

こんな今時珍しい芋ジャージが似合うのなんて、私ぐらいなのに！

「着替えてくるんで、ちょっと待っててください」

「ごめんごうむる」

「だったら俺のクラスまで一緒に来てください」

「勘弁してください」

「もー！俺にジャージで帰れって言っんですか？」

「手を離せって言っただよ！ついでに一緒に帰るといっ選択肢を捨ててくれと言いたい」

「じゃ、俺のクラス行きましようか」

「待てええ！なにが『じゃ、』だ！」

私の腕を掴みながら強引に教室へ行こうとする奴に対して、足をふんばって抵抗する。さっきからチラチラ人に見られてるのが気になっしょうがない。

これだから嫌なんだ。

まぶしい人間と一緒にいると、校門にいただけでも目立ってしまう。放課後の校門なのだから、これからあっという間に人も増えるだろう。

こうなったら奴の気をそらして、隙を見て逃げよう。

「ナツ先輩、おとなしくついてきてくださいよ」

「やだ」

「すぐ着替え終わりますから」

「やだ」

「こう見えても俺着替えめっちゃ早いんすよ」

「やだ」

「ナツ先輩？」

「やだ」

「ちょっと、生返事してるでしょ！」

あ、奴の気をそらす方法を考えたせいで生返事してたのバレた。

ぶつと頬を膨らまして拗ねる榎原。くそ！

イケメンでやつは、なんでもサマにしゃがる！

ふくれつつらを味方にできる男なんて小学校低学年までだぞ！

腹立つわ、本当に。

「とりあえず腕離してみようか」

「やだ」

「一瞬でいいからさ」

「やだ」

「オイ」

「やだ」

「『やだ』返しすんな！さっきの生返事のこと根にもってんな、お前！」

なにコイツ。子供か！

「もー！なんでそんなに一緒に帰りたがるかなあ？」

「だって、同じとこ行くんだから別々に帰るほうが不自然ですよ」

むしろあんたと私が一緒に歩いてるほうが不自然ですから。

「それにせつかく知り合っただからナツ先輩ともつと仲良くなりたいですもん！それにはまず、じっくり話しながら下校するのが一番ですよ」

はい、出ました。

人懐っこさ120%！

うんまあ、悪い奴じゃないってことは分かってる。

むしろ、こんな地味な私と仲良くなりたいと言ってくれるなんて良い奴だ。

しかし申し訳ないが、まぶしい人種である君とは仲良くなれない。

私の願いは、静かに地味ライフ送りたいということなのだよ。

君と関わったら、まわりの人の好奇心な視線にさらされてしまうのだよ。

例えば「何あいつ。地味女のくせに身の程知らず!」的な女子の怖い視線とかね!

さらに言えば、なにげにうざいところ)&しつこいところ)も仲良くなれない原因だ。

私はイケメンっぷりを見せつけられるとイラっとする性質である。どうやら私は世の中の女子とはまったく方向性のちがう女子のようだ。

「分かった、分かったよ。待ってるから。だから離して?腕痛いんだよ」

後半、多少演技してみた。

すると槇原はごめんなさいと言いながら力を緩めた。
今だ!

体育でも見せたことのないスタートダッシュを決めてやった。

なにやら奴が「あー!」とか言ってる声が聞こえたが、逃げたもん勝ちだ。

後で何か言われるだろうなと思いつつも、とりあえず良しとする。

・・・ちなみにその後。

喫茶店でのバイト中、ずっと文句を言われ続けました。やっぱりうざい。

兄、登場（前書き）

今回つっこみまくりの主人公

兄、登場

今日はまったく最高の一日だった。

金曜日は私の大好きな曜日である。

嫌いな体育も数学もないし、毎週楽しみにしているドラマがある。そしてなんととっても喫茶店が平和（槇原がいないから静か）だ。さらにさらに今日は学校で槇原を一度たりとも見かけなかったの、こそこそと逃げ惑う（地味に疲れる）ことをしなくて済んだ！
よって、私はなんとも最高に機嫌がいいのだ。

小粋に鼻歌を奏でながら、おじいさんと一緒に店を閉めて我が家へと向かう。

さーて昨日からじつくり煮込んで寝かせてあるカレーを食べよう。

さぞ美味しいのしょうな。実に楽しみだ。

上機嫌でリビングの扉を開ける。

・・・色々とありえない光景が広がっていた。

「あ、ナツせんぱーい！おかえりなさいーい」

ありえないその？。

槇原が家の中にいた。

ありえないその？。

めったに家にいない兄が、槇原とテーブルをはさんで座っている。

そしてありえないその？！

ふたりでカレー食ってる！

え、それ昨日から煮込んで楽しみにしていた、これから私の胃に収

まるはずのカレーだよな！？なに食ってんの！なに勝手に食ってんの！！

「春はる・・・と、マキくんじゃないか。どうしたんだい。めずらしい」

おじいさん。

めずらしいとかいうレベルじゃないからコレ。

確かに兄が家にいるのはめずらしいけども。

槇原に関しては突っ込むべきでしょう。

「二人は知り合いだったのかい？」

「いや、初対面」

おい！

なんで初対面の二人が仲良くカレー食ってんだよ！

「なんかコイツ怪しかったから、これから尋問しようと思ってたところ」

おい！

尋問って！しかもそんな奴にまずメシを食わすな！

・・・とりあえず、兄は意味わからん人だから無視しよう。

「槇原、あんた怪しい行動って、なにしてたわけ？」

「えー別に怪しいことなんてしてませんよう。家の前で待ち伏せしてただけです」

「じゅうぶん怪しい」

「失礼な！ナツ先輩にお願いがあって待ってただけです」

・・・お願いだと？

聞きたくねー。絶対かなえてやりたくねー。

でも、気にはなるから一応聞いてみよう。

「あのですね英語教えてください。月曜にテストがあつて、赤点とつたら1週間補習になっちゃうんです」

「え、やだ」

「即答しないでくださいよ！言っておきますけど、俺が補習になつて困るのはナツ先輩のほうですからね。俺、バイト来れなくなっちゃうんですよ」

ちつとも困りませんが。むしろ願ったり叶ったりって感じですが。ていつかなぜ上から目線なんだコイツは。

「奈津、勉強ぐらい見てあげたらいいじゃないか」

おじいさん。

きつとあなたは売上の事を考えているのでしょうか、私は嫌です。

「・・・コイツ、何者？」

急になんだ、兄よ。

いまさら。そして思いつき話の途中でしようが。

まあいい。いちいち兄に付き合ってたら日が暮れるので再び無視しよう。

「彼は榎原工くん。喫茶店のバイトをしてくれてる子だよ。それで、こつちが奈津の兄で春。マキ君は奈津と同じ学校だから春の後輩でもあるね。」

私と違って、おじいさんはきちんと二人の橋渡しをしてあげた。やさしいな、まったく。

「3年生のハルさん！ナツ先輩のお兄さんだったんですか？はじめまして」

榎原よ、にこにこ挨拶をしているけども。

君はもう少しでこの人に尋問をされるところであつたのだよ。

「マキ君、春のこと知ってるのかい？」

「めつたに学校来ないけどハルさん有名ですもん。かつこいい〜ってクラスの女子が騒いでました」

そう、実は我が兄もまぶしい人種なのである。

どちらかというとなつぱい顔立ちで華奢なタイプだが、地味に筋肉ついたり背が高いので立派なイケメンに属している。

基本的に無表情（実はぼんやりしているだけ）なところや、黒髪なうえに黒づくめの服装を好んで着ているあたりが神秘的に見えるように、イケメンぷりに拍車をかけているようだ。

余談だが、そんな兄は何をかくそう不良である。

私としてはこんな意味不明なぼんやり男が不良だなんてやってけねーだろと思うのだが、一応そういう仲間とつるんでいるから不良の括りに入れている。ていうか学校めつたに行かないくせに、噂になつてゐるってどういうことだよ。

もうひとり腹立つ人、身近に発見。

噂のハルさんと私が、兄妹だということバレないようにしなければ。

「こいつ電柱に隠れてこそこそしてたから、ナツのストーカーだと

思ってた」

兄よ。よくストーカーだと思った奴を家の中へ入れたな。

「あんだ、なにも電柱でコソコソしなくても・・・」

「だってナツ先輩、逃げるじゃないですか」

うう。

否定できない。

「無理やり家の中に押し入ってやろうと思って待ち伏せしてました。」

」

それはもはやストーカーと言っても間違いではないと思う。

おじいさん、目を覚ましてください。

彼はストーカー候補生ですよ。

被害者である私が、何故勉強なんぞ見てやらにやいかんのですか。そう訴えようとしたものの、おじいさんは既にいなくなっていた。

「・・・兄ちゃん、おじいさんは？」

「風呂」

「くそう、言い逃げか・・・。しょうがない、ただし1時間だけだからね。9時から見たいドラマあるんだから！」

「わーい！ナツ先輩の部屋楽しみ〜！」

はあ、最後の最後でどんでん返しをくらってしまった。せつかくいい一日だったと思ったのになあ・・・ちえ。

真夜中の攻防

榎原くん、君はいま何時か分かっていますか。
深夜2時です。

私の特等席であるテレビのまん前を陣取ったあげくに、愛用のクッションを一人占めしてベッドに寄りかかっている榎原。それに対して居場所のない私は、ベッドの上に身を小さくして座っている。

むかついたから枕を投げつけてみた。

「お前もう帰れよ！」

「え、今いいところなんですけど。それに勉強まだしてないですよ？」

「あんたが悪いんじゃない！冬ソナのDVD・BOX勝手に引つ張り出してきた見始めたあんたが悪いんじゃない！」

「まさかナツ先輩の部屋に冬ソナがあるなんてねえ。見るしかないでしょう」

「別に韓流好きな訳じゃないし。もらい泣きとかしたことないし」

「出た、ツンデレ」

え、今のツンデレなの？

使い方あってる、それ？

あのさ、私9時から見たいドラマあるって言ったよね。

せつかく8時にはお風呂入って準備万端にしたのに、あんたテレビ独占し続けたよね。

そんなもって、英語の勉強はどうした！？

お前ぜんっぜん勉強してないじゃん！

ずっと冬ソナ見っぱなしじゃん！

そりゃさ、冬ソナは最高だよ。

見だしたら止まらないのも分かるよ。

しかも今おまえが見てる所超いいとこだよね。

サンヒヨクの顔むくみっぱなしなのが気になるけども、泣けちゃうとこだよね。

「もう夜も遅いんでこのまま泊っちゃいます」

それ、こつち側が気を使って言うセリフなんですけど。

「もー、帰れよ！眠いんだよ私は！冬ソナ貸してやつから！」

「牛の刻参りに行くわしたらどうしてくれるんですか？三脚を頭にのせてわら人形もってる人に追いかけられたらどうしてくれるんですか？」

うん、それは怖い。

深夜2時だもんね。怖いよね。

なんか想像してみたら体が震えた。

「ちょうど明日バイトなんでここから行くほうが楽ですし。そんなもって英語は明日のバイトの後でよろしくお願いします」

「え、なに？明日もうち来るつもり？勘弁してよ。ていうか泊まるの許可してないんですけど」

「牛の刻・・・」

「だあっ！もう分かったよ。勝手にしろ。リビングのソファーにブランケットあるからそれで寝て。私はもう寝る！」

「はい、おやすみなさい」

もうダメだ。諦めよう。

冬ソナに魅了された今のこいつを止めることは難しい。

なにより私の眠気がもう限界だ。
布団にもぐって目を閉じた。

『ユジナー、ユジナー！』

『ミニヨシー！』

・・・冬ソナうるせー！

「ちょっと、私もう寝るって言ってんじやん。うるさいんですけど」

「あ、ごめんなさい。音下げますね」

「ちげーよ！リビング行けって言ってんだよ！」

「一階で店長寝てるんですよ？起こしちゃいませんか？」

「私は起こしてもいいってのか」

でもまあ確かに、おじいさんに迷惑かけるのはいけない。

音に敏感だから起こしてしまう可能性は十分ある。

「んじや兄ちゃんの部屋にでも行って。どうせいないだろうから勝

手に使っても平気だと思っ」

「ふざけんな」

え？なに今の。

まさか榎原？いやさすがにこんなこと言う奴じゃない。

声のしたほうを見ると、なんと兄がドアに寄りかかってDSを
しているではないか。

「え、兄ちゃん何してんの」

「別に」

「ハルさん、けっこ前からそこにいましたよ」

マジでか。

こえーよ、なにしてんだよ。

「見張らなくても、手出したりしませんよう」

「別にそんなんじゃないよ」

あたりまえだ！私なんかに手出そうと思うわけないじゃんか！

「つーかなんで兄ちゃん家にいんの？いつもいなくせに、なんで今日に限っていんの？不良なんだから出かければいいじゃん。それで部屋貸してよ」

「不良言うな」

「俺はナツ先輩のベッドで寝るんで大丈夫ですよ」

「おい！何言ってるの？なんで私のベッドをお前が使うの？そして私にどうしろと！？床か？私なんか床に転がってるでも言うつもりか？」

「こつすればいいじゃないですか」

そう言つて榎原はするりと私の横へ転がってきた。
しかもきちんと布団の中へ入って。

え、なにこれ。

添い寝？これって添い寝つてやつ？

妙に背中があつたかいんですけど。そんでもってなんか二本の腕が腹にまわってきたんですけど。

「ナツ先輩、固まっちゃってる？」

榎原が耳元でなんか言っただけど、ちよつと今ムリ。

こんな展開マンガとかで見たことあるけど、自分ちよつとムリ。

「おい」

はっと我に返ると、いつのまにやら兄が榎原をずるりと引きずって
いた。

どうやら自分の部屋へ連行するようだ。

ありがとう兄ちゃん。

さっきはこえーとか思ってたごめんよ。

「兄ちゃん。そいつボコっちゃって」

親指をたてて了解の合図をする兄。

そして私も親指をぐつとたてた。

榎原、グッドラック。

よくある少女漫画的ハプニング要素など、私の人生には無関係なの
である。

真夜中の攻防（後書き）

お兄ちゃんは地味にシスコンなのです

たまには乙女のように

本日のセボン又安藤。

それはもう忙しいのなんのって。

土曜日だもの、学校ないしね。

うちの王子様フルでバイト入ってますしね。

「あの！コーヒー追加くださいっ！」

「わ、私も！」

各テーブルから次々と手があがる。

お客様方、それ何杯目ですか？腹大丈夫ですか？

榎原と話すきっかけづくりの行為だ、ということは言うまでもないね。

奴は忙しそうに店内を動き回っているが、私はそんな光景を他人事のように眺めている。

すまん。可哀想だとは思いますが、君目当てなのだから仕方がないのだよ。

榎原目当てで通い詰めている人がけっこういて、すっかり顔なじみになってしまった。

といっても、私なんて見えてもいないだろうから一方的な顔なじみだけれども。

ちなみに学校の人には榎原がここでバイトしてることはバレてない。榎原に必死に（それはもう必死に）口止めたのを、律儀に守ってくれているらしい。

万が一、うちの制服着てる人が入ってきたら速攻隠れるつもりである。

そのための逃げ道はすでに確認済みだ。

ちなみに説明すると、カウンター裏の下らへんをコソコソ這いながら裏口へ抜けて我が家へ一直線コースである。

「はあ、今日もプリンスは素敵ねえ」

私の近くにいるお客さんから、ため息混じりの独り言が聞こえてきました。

私は貴方に聞きたい。

あれでも素敵に見えるんですか？

間抜け面にしか見えないのは私だけですか？

あごにでっかいバンソウコウ貼っていても、イケメンはイケメンっ
てか。

昨夜兄ちゃんにボコられた証も、奴のまぶしさを軽減させることは
できないってか。
ちっ。

そういえば昨日は結局、兄ちゃんの部屋の床で寝たらしい。

ボコった後にブランケットをかけてやる兄。

アメとムチですな。

ツンとデレですな。

こちらら妙に目が冴えちゃったもんで明け方まで冬ソナの続き見て
たっというのに、奴は非常にすつきりした様子で起きてきやがった。
そして遠慮というものを知らないようで、朝ごはんおかわりしまく
ってた。

腹立つわー。

この目の下のクマ、誰のせいだと思ってんだこの野郎。

「ナツ、ちょっと出かけてくるから店頼んだよ」

「はい。おじいさん行ってらっしゃい」

まあ、榎原さえいりゃ店回るから。

ていうか私いなくてもいいんじゃないの。

なんて思っただ、カウンターの後ろでこっそりマンガ読んでた。けっこうガッツリ読んだ。

うん、やっぱり最高！ガラスの仮面！

途中けっこう間あいてるからなく、絵変わってっけど仕方ないやね。私はアレだな、まばたき禁止の人形役らへんの話が好きだわ。

でもムリっしょ。いくらなんでもまばたきせずにはいられないっしょ。

人間だもの。(byあいだみつを)

ガラスの仮面最新刊を読み終わって、ふと顔をあげた。
ん？

榎原が困った顔してる。

相手してるのって・・・常連の女の子だ。つまり榎原の追っかけ。なにか話してるけどよく聞こえないなあ。

さりげなく近寄ってみよう。

「バイト終わるまで待つてるから！いいでしょう？」

「いやあ、ちょっと・・・」

「毎回そう言うじゃん！今日こそは絶対デートしてもらっからね」

「すみませんけど・・・」

「じゃあ、いつなら行けるの？」

うわ～

痛いなあ、あの人。肉食女子ってすげえな。

どう見ても榎原嫌がってんじゃない。

店のお客さんだから気を使って強く断れないんだろうな。

「もう！こうなったら今日終わるまで居続けてやるから」

「営業妨害なんですけど。そんでもってコイツ嫌がってるんで、これ以上しつこくするの止めてください」

「なんですって!?!」

しまった・・・。

つい口を挟んでしまった。

「あんだ、今なんて言った？」

怒ってる怒ってる。やつちまったなー私。

いやあ、でもさ。好きじゃないんだよねああいうの。
イラツとしちゃったんだよね。

「店員のくせになんて失礼な態度なの。私は客よ?こんなさびれた店に来てやってるだけありがたいと思いなさいよ。榎原君がいなきや誰がこんな店来るもんですか」

カチン。

うん。久しぶりに本気でカチンときた。

きつと私の全身から、ぶわっと冷ややかな空気が流れ出た事だろう。
いや、落ち着け。落ち着くんだ私。

ムカついたけど、ムカついてない演技をするんだ。

ガラスの仮面をかぶりなさい、ナツ。

はい!月影先生、私がんばります!

「もしかしてあんだも榎原君のこと狙ってるわけ?ブスはひっこんでなさいよ。榎原君、変な虫が調子乗る前にバイト辞めたほうがいいんじゃない?」

パリーン。

ガラスの仮面、割れました。
すみません月影先生。あっけなく割っちまいました。

「そっちのほうがよくぼど調子のっ・・・」
「ナツ先輩、かわいいですけど」

おいコラ、榎原！

しゃべってる途中でしようがっ！！言葉かぶせるんじゃないよ！
・・・ん？今、なんだった？

「・・・え？榎原、君？」

いけすかない女が目ん玉を丸くして、榎原を凝視する。
というか店内の全てが榎原に注目している。私もだ。
榎原はひょうひょうとした態度で腕を組んだ。

「さっきナツ先輩のことブスって言いましたけど、俺から見たらかわいいですよ？少なくともあなたより百倍も」

・・・店内が凍りついたような気がする。

「ちよ、なっ！あんた・・・なに、言っ・・・んがっ、舌かんだ！」

「じじいところも」

はあ！？

なに言ってるんのコイツ！？

「この店とナツ先輩のこと、バカにするのはやめてください。俺はそういう人は好きになりません」

いつもニコニコしてる榎原が、いつになく真顔だ。
へえ、こんな顔できるんだ。

ぼうつと榎原を眺めていたら、いけすかない女が目には涙をためて飛び出していった。

「あぁっ！食い逃げ！」

「俺が払います。お客さん一人減らしちゃったお詫びに……。すみませんでした」

ペコリと頭を下げる榎原。

なんで。

なんであんたが頭を下げるの。

「い、いいよ！あんたが払う必要なんてない！」

「いや、俺が怒らせちゃいましたから」

「もとはといえば私が怒らせただもん」

「結果的に、俺の言った言葉が原因だと思いますけど」

・・・まあ、そうかもね。

「……………じゃ、お支払いお願いします」

突然くるつときびすを返してカウンターの中に引っ込んだ私の後を、榎原がついてくる。

「ナツ先輩？」

背後から私の顔を覗き込もうとしてくるので、サッとよける。
そしてカウンターの中にしゃがみこんでやった。

そしたら奴もしゃがみこんできて、また覗きこもつとるので更によける。

それを何度か繰り返してたら、榎原がクスクス笑いだした。

「ナツ先輩、耳まつ赤ですけど。かわいいって言ったの思いだして照れてるんですか？」

「て、照れてない！」

一段と顔に熱がたまっていくのを感じる。

私、照れるとかそういうガラじゃないのに。

だけど、しょうがない。

人間なもの。

たまには照れる事だってありますよ。

「あはは、ほんとかわいい〜」

くっそう、からかって遊んでやがる。

「ただいま。ん？二人ともこんなとこで何してるんだい？」

おじいさんが帰ってきた。

その隙について私は脱走した。捨て台詞をはきながら。

「今日うち来るなよ！絶対、英語教えたりしないかんね！」

事前に逃げ道を確認しておいて良かった、と心から思った私でした。

〜後日〜

「ナツ先輩！見てください！」

「31点・・・」

「ギリギリ赤点まぬがれました！ナツ先輩が裏切ったから、どうなるとかと思いましたけどね」

「自分の力でなんとかなっただじゃん。二度と私に家庭教師なんか頼まないように」

「次は来週の数学対策お願いします」

「話を聞け！」

新しいあだ名ができました

私は今、大きな木の陰に隠れています。

先日家の前で待ち伏せしていた榎原も、今の私と同じぐらいコソコソしていたのではと思われませう。

まあでもここは学校な訳だし、女生徒がゴミ箱持って裏庭にいたって怪しくはないだろう。というか焼却炉行くにはココ通るしかない訳だし、いたって自然なはずだ。

そう、私はゴミを捨てに行きたいのだ。

とつとと掃除当番を終わらせて帰りたいのだ。

だから頼む。

早く告白しちゃってください、一年生のお嬢さん。

「あの、だから、その・・・私・・・」

恥ずかしいのかなんなのか、ずっとモゴモゴしてかれこれ10分だ。邪魔したら悪いと思って終わるの待ってるんです、私。

もうひとつ気を利かせてこの場を去るべきなのだろうが、いまさら木の陰から飛び出したら逆に目立つ気がして動けなくなってしまうた。

自信もってドーンと早く告白しちゃってください！

お願いします。私いいかげん帰りたいです。

「えっと、榎原さん？俺そろそろ時間が・・・」

コイツ告白され慣れてる感じまんまんですな。

そっぴや、ついこないだも店でしつこくされてたっけ。

おモテになりますね榎原氏。さすがまぶしい人は違いますね。

「……ま、榎原くん！私を彼女にしてください！」

おっ、ついに！よく言った！

さあ榎原。

早く承諾しておやりなさい。

「ごめん。俺セボンヌに夢中で忙しいから篠原さんとはつきあえない」

「え・・・セボ・・・？」

だよ、お嬢さん。

私もそこらへんよく聞こえなかったよ。

「うん。セボンヌ。ね、ナツ先輩？」

ぎゃあああ！

バレてた！覗き見してたの気づかれてた！

にこにこ顔の榎原が近づいてきて、木の陰からずりりと引き出された。

「申し訳ございません！告白現場に遭遇してしまってますみません！私はただゴミを！ゴミを捨てに行きたかっただけなんです！」

お嬢さんに土下座をする勢いの私を、榎原がなぜか後ろから羽交い絞めしてくる。

やめろお！

こんなときに悪ふざけするな！

「……あなたがセボンヌ・・・？」

お嬢さん！

セボンヌって、人の名前じゃねーですよ！

私のどこにセボンヌの要素がありますか！？

どこの国がよくわかんねーけど、そんな外人風の名前を持つてるように見えますか！？

「榎原君、この人だれ？」

「セボンヌのナツ先輩」

え、なにそれ。

セボンヌのってなにそれ。

「榎原くん、このセボンヌさんに夢中なの・・・？」

ナツ先輩って紹介したじゃん。そこ無視してセボンヌさんにしちゃうの？

「んー」

んー、じゃない。

きちんと説明しなさい。

『セボンヌ安藤という喫茶店でバイトをすることに夢中なんです』
って言いなさい。

羽交い絞めして遊んでる場合じゃねーんだよ。つか苦しいからやめろ。

ほら誤解しちゃってる気配するよ。

なんかワナワナふるえてるよ。

そしてお嬢さんは密着する私たちを見て、瞳をうるうるさせた。

あ、やばい。

時すでに遅し。

大きな瞳からポロポロと涙があふれた。

ああ、泣かせてしまった。

榎原が100%悪いと思うけど、でも私も彼女を泣かせた原因であることは事実だ。

「お嬢さん泣かないで。そもそもこんなやつ好きになったのが間違ってますよ。こいつはね、うっとうしくてしつこい男なんです。いや、悪い奴でないことは認めますけどね。あと顔がいい事も認めますけどね。こんなのと付き合っても面倒なだけですよ。そしてハッキリ言いますが、私とこいつはほとんど無関係といってもおかしくない感じの浅い仲です。だからどうか学校の皆に変な噂流したりしないでください。お願いします。目立ちたくないんです。マジで」

「ちよつと、ひどいじゃないですか」

腹に肘鉄をくらわせると案外簡単に自由になれた。

うづくまる榎原を無視して、私はお嬢さんにハンカチを差し出した。お嬢さんは驚いた表情をしたけど、受け取ってくれた。

「ありがとうございます、セボン又さん。・・・私、本当の事言います。実は榎原君のこと本気で好きってわけじゃないんです」

「は？」

「私、明日から転校するんです。池ノ森学園に」

「池ノ森・・・って男子校じゃなかったでしたっけ？」

「はい。というのも私の双子の兄が失踪したんです。それで兄の代わりに男装して通えって親に言われて・・・『共学最後の思い出づくりに彼氏ほしいな』、できれば超かっこいい彼氏』って思って、やけくそで告白してみただけなんです。ちなみに泣いてしまったのは二人がじゃれあっている姿を見てたら、昔よく兄とプロレスごっこしたのを思い出してしまって。そしたらまた兄への怒りが蘇って、

つい涙が出てしまいました」

えー・・そんな理由で泣いてたんですか、あなた。ていうか兄が失踪って結構深刻じゃね？

んでもってなに、そのドラマみたいな話。

イケメンパラダイスフラグ立ってんじゃん。絶対に転校してから逆ハーレム状態になるでしょ。むしろそこで超かっこいい彼氏できると思うよ。

「ですから榎原くんのことともういいです。セボンヌさんにお譲りします」

「譲られても困ります」

譲るも何も振られてましたよねアナタ。

なんか最初のイメージと変わってきたな、このお嬢さん。

「では私はこれで。明日の転校に備えて髪を切りにいかないといけないので」

うわー。

切り替え早い。

あぜんとしたままスタスタと去っていく彼女の後ろ姿を見送った。

いつのまにやら榎原が復活していて、にこにこしながら私の前に立った。

「なにか？」

「譲られてしまったので。これから俺はナツ先輩の所有物となりました。なにとぞよろしくお願いします」

「いらんわ。他の人の所有物になれ」

「えーいやです」

こっちもいやです。
全力で拒否させていただきます。

山中君の観察日記（前書き）

まさかの再登場です。

山中君の観察日記

俺の名前は山中雄太。

最近、ある人物に目を光らせている。

というのもサッカー部の副部長として、大事な任務を遂行しなければいけない為だ。

うちのサッカー部は弱い。それはもう自分達でも笑っちゃまうほどに弱い。誰か助けてって言っちゃうほどに。

そんな矢先、俺は球技大会でサッカーがうまい奴を見つけた。

そいつの名前は榎原工。

入学したときから注目の的である1年生だ。

イケメンかつ、裏表ない性格のため男女問わず人気者というチートな奴。

んでもってサッカーまでうまいのかよ！って思うと、少し腹がたつた。

女子に人気ある奴は男子に嫌われるってのがセオリーだろ。

まあ・個人的な嫉妬は抜きにして、サッカー部の為に奴を引きぬくしかあるまい。

んで、なんとか榎原との接触をはかりたい。と思っていた訳だ。

先に言っておくが、俺は人見知りのヘタレだ。

見ず知らずの人に突然話しかける勇氣など、持ち合わせていない。

そんな時に、隣の席の安藤って女子が榎原と仲がいいらしい噂を聞いた。

ラッキー！安藤に間に入ってもらって接点をつくらう！

とウキウキして登校した翌日、安藤にキツパリと関係ない人だと言われた。

その時の俺の気持ちは、まさにガビーンであった。

高橋に変態扱いをされたり安藤に生ぬるい目で見られたっていうのも、ダメージ要素の一部だ。

しかし、俺は諦めない。

念のため安藤の後をつけてみた。(ストーカーとか思わないでください)

確かに、その日は榎原と安藤が話しているところは見なかった。

そう、『話しているところ』は。

昼休み、席でメシを食い終わった安藤はふらりと廊下へ出て行った。すると安藤の向かう方向に榎原が現れたが、こちらには気づいていないようである。

向こうは数名の友達に囲まれて(ちっ)、廊下でギャーギャー笑い始めた。

なにがそんなにおかしいのか知らないが、携帯見ながら爆笑してる。なんだよ、なに見てんだよ。気になるじゃねーか。

ま、とにかく。知り合いならばすれ違いざまに挨拶をかわすだろう。俺はそれを見届けるのだ。

くるっ

突然、安藤は体の向きを180度回転させた。

つまり後ろを振り返り、今来た道をすたすたと戻ってくるのだ。それも小走りで。

とっさに窓の外を眺めているフリをしたら、安藤は俺に気づかず通り過ぎた。

妙だな。

あまりにも不自然。

違和感を感じた俺は、次の日も安藤の後をつけてみることにした。

そしたら今度は、あからさまに逃げたのを目撃した。

正直あの逃げっぷりはすごかった。

昨日とほぼ同じシチュエーション。だが今回は榎原が安藤に気づいた。ニコニコと思いつきり手ふってきたのに、それを見た安藤はすんげー嫌そうな顔して無視した。そこでダツシュで走り抜けていった。

榎原の友人達が「お前急に何してんの？」なんつって、またもや爆笑していた。彼らは安藤の存在に気づかず、榎原が一人で変なことした程度にしか思わなかったのだろう。

思いつきり無視された痛々しい榎原を見て『なんか可哀想』と思つたものの、とにかくこれで判明した。

あいつら絶対知り合い。

んでもって安藤は榎原を避けている。

何故だ？

普通あんなイケメンと知り合いだったら、自慢してまわってもおかしくないと思うのだが。

聞きてー、でもまた嘘つかれて終わりだろーな！。

つて感じで悶々として数日がたった。

そんな俺にまたとないチャンスが訪れた。

場所は俺のクラス。時は放課後。

教室には俺一人だけが残っていた。部活の活動報告を仕上げていたのだ。

集中していた俺は、後ろのドアから急に声をかけられて飛び上がった。

なにせ俺はヘタレだから。不意打ちに弱い。

くそう、はずかしい。

せめて前から来い！と言ってやる意気込みで（実際に言う勇氣はない）、振り返るとまさかの榎原工がそこにいた。

「すみませーん、安藤奈津さん帰っちゃいました?」

コイツ、人見知りの俺がビビっていた『見ず知らずの人に話しかける』という大技をさらっとやりやがった。

しかし、話しかけられてしまえばこっちのもの。

こっちは受け手なのだからビビる必要はない。

「あ?しらねー」

本当は知っているのに、先輩風ふかす感じで対応してみた。

「そうですか。ありがとうございます」

榎原がさっさと去っていく。

そりゃそうだ。もう用ねーもんな。

くそ、せっかくのチャンスをつぶしてしまった!

会話をつなげる!そしてうまくサッカー部の話へ持っていくんだ!

「まてまてまて!サッカーしようぜ?」

・・・俺はアホだ。

うまく話を持っていくつもりが、速攻で切り出してしまった。

見ず知らずの奴にいきなりこんなこと言われたら、そりゃポカんとするわ。

「サッカー?今からはちょっと・・・すみません」

真摯に受け止めてくれた。

ありがとう、丁寧に対応してくれて。お前いい奴だな。

俺はコホンと咳払いをして、自分を落ち着かせた。

「いや、そうじゃないんだ。サッカー部入らないか？って意味」

「部活は入る気ないです。ごめんなさい」

速攻フラれた。

まーでも無理やりってわけにもいかないからな。しかたないよな。

「分かった、こっちこそ急に悪かったな。・・・ところで、安藤になんか用？」

せっかくだし聞きゃえ。

「一緒に帰りたかったんですけど、もういないみたいですね」

「お前らって知り合いなの？」

「はい」

「ふーん。こないだ安藤に聞いたら赤の他人でまったく知らないって言ってたけど」

「あの人、ツンデレですから」

え、ツンデレなのあいつ？

ちよつと意外。なんでか知らんけど敬語だし、大人しいからツンデレって感じには見えねーけどな。

「ナツ先輩と仲いいんですか？」

「仲いいっていうか、隣の席だからそこそこ話すけど」

「いいな。俺なんて学校じゃ避けられまくってますよ」

うん、知ってる。

「なんで避けるんだらうな？」

「ツンデレですから」

さつきも思ったけど、なんか意味違う気がする。

つつか、あの逃げっぷりをツンデレで片づけるお前もすげえな。

「隣の席なんてうらやましいです。ナツ先輩のこと見てたら、あつという間に一日すぎちゃいますよね？」

「え？そんなことねーけど。そもそも見てねーし」

「そうですか？俺だったら飽きないけどなあ」

「お前、ずいぶん安藤のこと気にいつてんだな」

「はい！かわいくてしょうがないです」

え？

かわいい？あの安藤が？

いや別にかわいくないとか言ってる訳じゃなくて。

なんつーか、一言で表すなら『普通』だよな。もっと悪く言ってしまうば『地味』。

こんなに目立って存在感ある奴が、あの普通さのどこに惹かれるの
だらうか。

「普段ツンツンしてるのに、たまにかわいいとこ見せてくるんですよね。こないだもかわいって言ったら顔真っ赤にして照れたりとかしてて。あと、ぎゅってしてみたら固まっちゃたりとか」

なにこれ。

なんかノロケ話聞いているみたいない気分なんだけど。

横原のほづが好意もってる感じに聞こえるんだけど。

しかも安藤の様子を見る限り、一方的に。

「・・・はー。予想外だったわ。びっくりだわ俺」
「？」

なんか急にコイツを応援したくなってきた。
あの避けられっぷりは哀れすぎる。

「安藤さつき帰ったばかりだから、今ならまだ間に合うんじゃないの？携帯かけてみれば？」

「ナツ先輩、携帯持ってないんですよ」

「いや持つてるけど」

「持つてないですって。本人がそう言っていましたよ？」

「いや、しょっちゅう机の下で携帯いじってるけど」

俺は隣の席だから知っている。あんまり気にしたことなかったけど絶対見たことある。

「・・・」

「・・・」

あ、コイツ嘘つかれたんだ・・・。

携帯番号教えてもらえなかったんだ・・・。

さすがに、榎原もへこんでいるように見えた。
かわいそうに。

事情はしらんが、こいつらの今後が気になる。
今後もこの二人を観察していこう、と思った。

非日常的な昼休み

どうも、安藤奈津です。

私は今、なぜか見知らぬ男子3人に拉致されています。

昼休みに廊下を歩いていた私は突然この3人組に捕まり、めったに使われていない音楽準備室へ連れてこられた。

そして何をするのかと思えば、3人でコソコソ話しあっている。

放置されて、はや10分。

なんだこれ。私ここにいる意味あんのか。

もはや私がここにいること忘れてんじゃないだろうか。ていうか、あんたたち誰？ていう。

「ど〜する〜？あいつ気付いてないんじゃないの〜？」

「さっきメールしといたんだけどな」

「もっかいメールしとけばあ？はやくこないかな、俺ヒマだわ」

「俺も〜。せつかくだからなっちゃんと言え〜かな〜。っつて、ちよつとちよつと！どこ行くの〜!？」

3人の後ろを普通に通り越して部屋を出ようとしていた私を、3人の中の一人が捕まえる。

「教室へ戻りたいんで離してもらえますか？」

「だめだめ〜！なっちゃんに帰られちゃったら困る〜」

私の腕を自分の腕に絡ませるこの男。

やたら語尾をのばす口調が馴れ馴れしいこの人物は、明るい茶髪にかわいらしい顔をしている。子犬っぽい感じだ。

「なっちゃんてもしかして私の事ですか？そんな風に呼ばれる覚え
ないんですけども」

「なっちゃんはなっちゃんだもん」

なにこの人。話が通じてない。

「まあまあ。とりあえずココ座って座って」

ゆるいパーマ頭のやたらニコニコした男が、私の肩を押しして元の場
所へ戻そうとしてくる。

「もうすぐ昼休み終わっちゃうんで帰りたいんですけど」

「だいじょぶだいじょぶ」

だいじょぶ。じゃねーよ。

ニコニコしてくせに有無を言わせない感じを醸し出すこの男。な
んだその甘い笑みは。榎原の天然爽やかスマイルとは180度違う
笑顔だ。察するに腹黒キャラと思われる。

こいつによつて再び座らされてしまった私は、こつなつたらとつと
と用件を聞いてしまおうと開き直すことにした。

「あの〜なんなんですか。私になにか用でもあるんですか？」

子犬と腹黒男は話にならなそうなので、もう一人の黒髪の無表情な
男を見上げた。

「まあな」

そう言いながら携帯のカメラを私に向けてパシャッと音を鳴らした。

「もしかして今、写真撮りました？私のこと盗撮しました？」

「本人の目の前で撮ったから盗撮じゃない」

「撮影の許可出してないので盗撮です」

「変なことに使うわけじゃないんだからいいじゃねーかよ」

「よくねーよ！目的が謎すぎてこえーよ！なにに使うんだ、そんな地味写真！」

あ、つい口が悪くなってしまった。

この人達のマイペースな感じが、あのまぶしい生き物とすごぶる似てるせいだろうか。

・あ、そっか。さつきからなんかイラつくと思ってたら、榎原と一緒にいるような感覚になるからだ。よく考えてみれば一方的に拉致されたうえに馴れ馴れしくされてるんだから、こっちだって敬語使う必要ないよな。

開き直った私を見て、腹黒男が声をあげて笑った。

「なんだ腹黒野郎。なに笑ってんだ」

「腹黒〜？」

子犬が目をパチクリさせた。そして、腹をかかえて大爆笑しだした。

「なっちゃんすごい！こいつに腹黒なんて言った女の子初めてだよ〜！」

「たしかに。普通気付かないもんな」

無表情男もわずかに驚いている様子だ。

突然、肩にぐぐぐと強い力がのしかかってきた。同時に黒いオーラも。

「だれが腹黒だつてえ？」

「ちよ、痛い痛い！」

ニコニコしてそんなことしてくる時点で腹黒確実じゃねーか！

「いだだだだ！」

だれか助けてえ！私の肩がつぶされるう！

音楽室にリコーダー忘れた男子とか、偶然に通りかかってくれえ！

ガラッ

準備室の扉が開いた。

「きたあ、リコーダー男子！ありがとう！……って、お前かよ！」

待ち望んだ救世主は、私がこの学校で一番会いたくないアノ男であった。

「お前ら、なにしてんだよ！」

この際お前でもいい。とにかくこの怪しい3人組から助け出してくれ。

「おせーんだよお前」

「ほんとほんと、遅すぎ！」

「あ、タクミもうち来ちゃったの？もうちょっとなっちゃん遊びたかったのに〜」

え？

どゆこと？まさかの知り合い？つかゲル？

「榎原あ！お前どーゆーつもりだ！私を拉致するなんて！」

「ちよ、違いますよ！てか現状よくわかんないんですけど！いきなりこんなメールが送られてきたから、あわてて来たんですよ！」

榎原が差し出してきた携帯の画面を見た。

そこには、肩や腕を押さえつけられて不機嫌な顔をした私の写真と、『女は預かった。音楽準備室にて待つ』という文章が。

「あ、さっきの盗撮写真！」

「だから盗撮じゃねーって」

「うっさい！」

キーキー怒りだした私をなだめるように、子犬と腹黒野郎が肩や腕をさすってきた。

すると榎原が近寄ってきて二人の頭をゴチンと殴った。そして二人の手をパツと払い落として私を背中に隠した。

「さわんなよ」

「あ、嫉妬してる」

「ウケるウケる、あはは」

榎原を指差して笑い転げる二人の男。なんだこいつら、すんごくバカっぽい。

「ナツ先輩になにしたんだ？」

「別に何も」

無表情男がしれつとしてそう言ったので私は槇原の背中から顔を出して睨んだ。

「こいつらにいきなり拉致された！肩ぐぐぐってやられた！」

「こらこら、それは自分が悪いんだよ？」

腹黒野郎がにこつと笑った。黒いオーラで。

あまりに黒かったので、さっと槇原の背中に顔を引っこめることにした。

「お前ら、なんでこんなことしたんだよ？」

「そつだ！いいかげん目的を言え！」

槇原に便乗して、再び顔を出す。

「なんでって・・・タクミの為にひと肌ぬいでやるうと思ったただだよ」

「そーだそーだ。携帯ごときでお前がウジウジしてっからさあ」

「学校じゃ逃げられるっていつから、わざわざここまで連れてきてやったんだろーが」

「・・・お前ら・・・」

事情が呑み込めずポカンとする私を放置して、槇原は3人と握手を交わしだした。

「待て待て、結局どゆこと？」

拉致しといて2回も放置するとか、いいかげんにしろ。

槇原と無表情男の握手をチョップでぶったぎってやった。

槇原の背中から出てきた私の目の前に、腹黒野郎の手のひらが差し

出された。

「はいはい、携帯出してえ」

「携帯？」

なんだいきなり。

事の展開についていけずに眉をしかめる。

「タクミがさ、なっちゃんが携帯教えてくれないって落ち込んでるんだよね。お願いだから教えてあげてくれない？」

「・・・まさかそんなことの為に拉致したわけ？」

「一応あなたの為に場所移動してやったつもりなんだけど。別にこっちはあなたの教室乗り込んで」

「拉致してくださって感謝します」

無表情男に頭を下げる私。

「はい、ゲットゲットー」

なんとまあ。

いつのまにやらスカートのポケットに忍ばせていた携帯が抜き取られて、腹黒野郎の手のひらに収まっているではないか。

「・・・ナツ先輩のうそつき・・・」

榎原がしゅんとしてうなだれた。

どうやら以前、携帯もってないって嘘をついたことを根に持っているようだ。

くっそー、なんで嘘だつてバレたんだ。

面倒くさいから教えなくなかったのに。

「ね？いいでしょ？教えてあげて？」

「や・・・」

「ムリムリ、もう交換しちゃった」

やだつて言おうとしたのに！なに勝手に操作してんだ、この腹黒野郎！

「・・・ナツ先輩。怒ってますか？」

「あたりまえだコノ野郎。この短時間の間にどれだけストレス抱えたと思ってるんだ。どいつもこいつも榎原にそっくりでマイペースかつ強引すぎだろうが。あと、敬語つかえ敬語。後輩らしさが無さすぎんだよあんなたち。それとさ、5時間目の授業始まっちゃったじやん。遅刻とがしたことはないんですけど。途中から教室入る勇気とかないんですけど」

「なっちゃん、タクミに携帯知られたことに怒ってんじゃないの？」

「ちげーよお前ら3人にだよ！携帯なんてもはやどうでもいいわ！

「やったねタクミ！なっちゃんの携帯あっさりゲット！」

「その子犬、特にお前だ。なっちゃんとか言うな。安藤先輩と呼べ」

「むり〜。いまさら呼び方変えらんない〜」

「・・・いまさら？初めましての関係じゃん」

「実際に会うのは初めてだけどよ。いつもあんたの話聞かされてっから、こっちにしてみりやずっと前から知ってたわ」

「そうそう。廊下で逃げていく様子とかたまに見かけるし」

なんですと。

そっぴや以前、廊下でバカみたいに笑い転げるところに遭遇したことがあった。

あんときの奴らか！

「お前え、なにベラベラしゃべってんだあ！お前との関係知られたら困るんだよ！こちとら必死に地味ライフ死守しようと頑張ってるぞ！」

「地味ライフ？なんですかそれ？」

「お前には縁のない世界のことだよ！」

「なつちゃん。タクミ俺らにしか話してないよ？」

「よくわかんないけど、あんたタクミと知り合いだっってこと隠したいんだろ？他の奴らは気付いてねーから安心しろ」

そうか。

とりあえず女子に知られてなくて良かった。ホッと胸をなでおろす。

「なつちゃんいつも逃げちゃうからさ、俺たちも話してみたかったんだ」

「そうそう。タクミがハマってる女の子気になってたんだよねえ」

「女の子言つな。先輩と呼べって言ってるだろうが」

「なつちゃん面白くて俺も気にいっちゃった！仲良くしようね！」

「話をきけ。そして敬語つかえとさっきも言ったはずだ」

うざい。

本当にうざい。

なんか榎原のほうはまだマシな気もしてきた。

よく見ると榎原ほどまぶしくはないが、この3人もなかなかの顔を
をお持ちだ。

完全に勝ち組系統の人種だろうな。

この4人。さぞや目立つのでしょうか。

「あんたら全員、校内で私に話しかけないように！」

「分かりました。でもナツ先輩がメール無視したら話しかけます」

ちくしょう。

無視する気まんまんだったのバレてた。

・・・やっぱり携帯知られたのまづかったみたいだ。

がっかりとうなだれながら音楽準備室を出る私に、追い打ちをかけてくる榎原。

「あとでメールしますね」

ああ、面倒くさいことが増えてしまった・・・。

人気のない廊下をとぼとぼと歩きながら、私は深いため息をついたのでした。

・・・そういえば、授業中に携帯をいじっていると隣の席の山中君の視線を感じるんだよなあ。

なんでだろ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5714y/>

まぶしい人は嫌いです

2011年12月23日00時48分発行